記録2 ～1984

近代化路線
機械化・専業化・大規模化。
人も産業も豊かに伸び伸びと。

川南に畜産が広まっていったのは、旧軍用地が平らで固く、火山灰土壌で地力が弱かったことと無縁ではない。なかでも酪農は現金化のメドが立て易く、早くから機械化が進んだ。水穂地区に住む開拓者の一人はこういう。「ここら辺は落下傘部隊の演習地跡だから、平らだったけど掘ってみると大きな石がゴロゴロ。やっと食べる分の作物を作ってました。四十年代に入って選択的拡大とか専業化の時代といわれ、家族とも相談し、酪農一本にしたんです」

富山県から菊友地区に入植してきたある開拓者も早くから酪農に絞り、三十五年頃から搾乳機のバケットミルカーなど機械化に乗り出している。「あまり収穫も上がらない土地でしたから、もう二十六年頃には酪農に絞ってましたね。ちょうどアメリカに農業視察に行く機会にも恵まれ、そこで見たものはすべて機械を使った大規模農法、驚きましたよ、これはなんとかしなきゃって…」。一般には大型機械の導入は四十年代に入って進んだ。

昭和四十二年には川南町営牧場も完成し、四月から放牧が開始されている。四十六年の第十回全国農業祭では、畜産部門で川南・児湯酪農業協同組合が「天皇杯」を受賞、全国からその品質が認められた。五十年代に入ると畜産分野に人工授精が普及、生産性が格段にアップしていくことになる。

果樹や農作物の分野でも機械化や様々な変化がみられる。農薬散布の防除機械がミカンに使われ出したのも四十年に入ってから。作業が随分軽減されるようになったことはいうまでもない。四十八年頃からはミカンの生産過剰を調整する意味もあってジュース工場が操業を開始している。

四十年代は春はバレイショ、秋はカボチャ、という露地栽培が盛んで、これにプリンスメロンが加わった。五十年代の主役はキュウリやメロンなど施設園芸。この頃からハウスものが広まる。

昭和四十四年に就農した湯牟田地区の開拓二世の方に話を聞いた。早くから農業に興味を持ち、農業高校に進んだ。作れば売れる時代、農業が楽しかったという。「迷うことなく水稲と園芸作物を選び、父のブロイラーは受け継がなかった。最初はキュウリ、ハクサイ、カンラン、いまではジュース用のニンジンやレタス、バレイショ、サトイモなどを作っています」。バラバラに点在していた農地を集約し、トラクターや田植え機を導入したという。こんな風に機械化への道を歩んだ農家は多い。

この時代、漁業も大型化・動力化へと進む。二トン未満の小型漁船が中心だった三十年代から、五トン未満クラスが主流の時代を迎える。四十年代後半に入って、港の整備も進み、船を港に係留させることが可能になった。これらにより、出漁日数が増加し、当然、漁獲高も増えることとなった。

時代は高度経済成長期。日本の総人口は一億人を突破し、全国各地で高速道路建設が始まっている。九州自動車道宮崎線は四十七年に着工、約十年後に開通した。四十六年には宮崎―阪神間を十五時間で結ぶカーフェリーも営業を開始、川南からの物流体制に変革をもたらした。

トロントロン商店街が「土曜夜市」を初めて開催し、運動公園に野球場が完成、川南町文化連盟もこの頃発足している。

あらゆる産業が規模を拡大し、発展を遂げた時代といってよさそうだ。と同時に、いろいろなフィールドで人々が伸び伸びと振る舞える環境も整いつつあった。

川南町の今昔

川南の記録

FRONTIER SPIRIT

●昭和40年頃の畜舎

●現在の畜舎

●昭和30年頃の川南漁港

●現在の川南漁港